

日本GAP 10 仙台支部報

IGAP-JAPAN SENDAI INFORMATION

頒価 無料/送料60円(切手可)

○編集人: 安藤澄雄

○発行人: 笠原弘可(仙台支部代表)
申込先 〒980 仙台市東10番丁1

国鉄アパート1-18

やってみようよ!

仙台市

太田節子

私は以前から、コンピュータについて興味を持っていました。でも興味は持っていても、それより先に進むことなく何年かを過ごしてきました。昨年の夏、職場にコンピューターが導入された時、ついに私は心を決め、プログラミングの勉強を始めました。

興味があったとはいうものの、あなたの使用しているコンピューターは何ビットですかとたずねられても答えられない程、その方面についての知識はありませんでした。でも最初から何でもわかる人などいないんだからと、自分の無知をタナに上げ、プログラミングの入門書を買ってきて、3カ月程前より一人で勉強を始めました。本を読んだだけでわかるかしら、よくそう言う人がいます。そういう人に限って、内心わかるはずがないと決めつけあきらめてしまっている人が多いようです。最初から、もしかしたら本を読んでもわからないんじゃないかなどというように、逃げ腰で取り組んでいたのでは、わかるものもわからなくなってしまいます。もしかしたら、そう思ったとたん、理解への可能性を自分から捨てているといってもいいかもしれません。

仕事中は勉強時間を取れないので、勤務の終わった後ひとり部屋に残り、パソコン相手に勉強を始めます。ある晩のことでした。ある練習問題に取り組んでいたのですが、気がついてみるといつの間にか、ノートに何やら書いていたではありませんか。手にペンを持ってポーッとしているうちに、答えらしきものを書いてしまったらしいのです。ために、書いたプログラムを実行させてみると何と正解

ではありませんか。しかしどんなに考えても、自分がどうやってこのプログラムを組み立てたのか思い出せません。手にペンを持ち、何か書いていた記憶はあるのですが、何をどうやって書いたのかまったく覚えていないのです。誰かが私に答えを教えてください、そんな気がしてなりませんでした。次の日になっても、ついに私は、そのプログラムをどうやって組み立てたのか思い出せませんでした。

その後勉強が進むにつれ、いく度か難問にぶつかり、ひとつの問題について3日間考え続けたこともありました。そんな時私はまず最初に、難しい問題だからといって身構えずリラックスするよう自分自身に言い聞かせます。そして次に、今わからないからといって、不安がったりあせったりすることはないんだからと再び自分自身に言い聞かせます。大事なはその次です。必ず正解を見い出せる、この事を繰り返して言い聞かせ心の中で確認します。

ある事について知りたいと思えば、そのための方法は必ずや知らされ、やがてはその知識を自分のものとする事ができるでしょう。大切なのは自分自身が内に秘めたパワーを信じていることだと思います。自分自身を疑うことなく信じることができたなら、正解を見いだせるのはもちろんのこと、自分が望んでいるすべての事をなし得ると思います。

私の会社はほぼ週休二日制に近いので、勉強のために休日も利用したいと最近思うようになりました。そのためには、パソコンを手に入れる必要があります。どこか安く買える店はないかと探していたところ、運よく

同僚が見つつけてくれました。しかも展示会で1回使用しただけのディスプレイ(テレビのようなもの)を原価で売ってくれるとのことで大いに助かりました。

イメージをイメージのままで終わらせないためには、イメージ実現のためにできる限りの努力をすることが大切です。イメージ実現に対して自分自身をどれだけ向かわせることができるか、それが成功そして失敗を

決定します。目標を決め、信念を持って努力することにより、周囲の状況が自分に向かって動き始めます。ひとつの成功が、イメージは必ず実現できるという確信をもたらし、そのことが、次の成功への自信にとつながります。

どれ程の間、プログラミングについて勉強することになるかまだわかりませんが、これからしばらくの間は、このまま勉強を続けていくことになりそうです。教知れぬ援助を受けながら……。

ぼったりと風

柴田郡
安藤澄雄

(言うまでもなく)川柳である。1981年9月6日、山形駅構内の柱に掲示してあった。外にも十数点掲示されていたが、みん小さい字なので、これはたぶん特選かまたはお手本だろう。

私には短歌・俳句・川柳などの心得が全くないので、このタイトルの川柳が一般にどの程度の評価を得ているか知らないが少なくとも私にとっては自分の存在と雑踏を忘れるほどの衝撃だった。(作者も忘れた)

作者はいつ、どこで、どんな気持ちで、どんな風に出合ったのだろうか?

春か?—ゴールに向かってけり込んだはずのボールが砂ボコリとともに戻ってきた。仲間の笑い声—。春一番のいたずらだ! おい、みんな、やっと本格的な練習がやれそうぞ!

街の中でか?—信号待ちの乳母車の中で新しい命が眠っている。疑うことを知らない命をやっと何かを信じられるようになった命が見つめる。春—他の人々に少し遅れて母親がそっと両手に力を入れる。なめら

に動きだした乳母車の中の幼児の髪を、ゆらしたのは、風—。

悲しかったか?—外は夜。涙なんか出やしない。開いた本は2時間前と同じページ。涙なんて出やしない。こんな部屋に響くのはせいぜい時計の音と窓ガラスを打つ風の…アッ、風が、風がさきからずうっと窓をたたいていくれたんだ!

——ぼったりと風——
作者は結局、今までに出合った風のすべてに思いを込めてこの句を作ったのだろうか。思い返せばいつだって風は自分を包んでくれたし、これから一緒に在るだろう。それによく気づいたことの恥じらいと、喜び—そんなものまで感じ取るには無理があるだろうか。

私はこの句の「風」の部分いろいろな言葉に置きかえてみた。「ぼったりと犬」「ぼったりと女性!」「ぼったりと足」「ぼったりとゴミ」「ぼったりとピザ」…ほとんど冗談に近い句になったが、しかし「ぼったりと」がつくと何かしら新鮮な気がする。本当はいつも一緒だったのに、意識しないから気づかない。本当はいつだってこんなにも新鮮に存在していたのに。

いつかこう感じてみたい——
「ぼったりと 愛」



たいよう

3

船橋市

ホップ
ジョーン

似てきた...

小学校の教員になってから、早1年が過ぎ去ろうとしていてその間、1年生の子どもたちとも長いつき合いになって、その分とても親しみを感じさせられている。

長くつき合い続けているとお互いに似てくる、というのは本当のようで、子どもたちも私の性格のすみずみまで驚くほど正確にコピーして、身ぶり、言葉づかい、字、クセまでも似てきている。それも私のあまり好ましくない面を子どもたちは吸収しているようで、どうも気が気でない。1年生には私の外に5名のステキな女先生がいて、それぞれがベテランで、穏やかで美しく、やさしい先生ばかりなので、子どもたちも各担任の先生のように穏やかに、賢明に、知的に成長しているさまを見ると、いつもわがクラスの子ども

たちの未熟さを見ては情けなくなくなってしまおう。

わざわざこんな新米教師に出くわすなんて、この子らは不運なものだ、と否定的なことを考えると、GAPの皆々様にしかられそうなので「この子らよ、この山口先生に巡り合えるとはなんて幸運な星の下に生まれたのだろう」なんて調子に乗ると余計いびられますね……。いや実際、男の先生が1年生を受け持つというのはかなり珍しく、さらに就職1年目にして、純粋心豊かな1年生を担任することはまずないことのようにだ。本当はこの担任のほうが教えてほしいのに、その担任が子どもたちに教えるなんぞ、全くメチャクチャもいいところである……。

ともかく子どもたちにとってこの山口先生は自分たちの唯一のせんせいであり、いやがおうでも毎日顔を合わせ、あまりおもしろくもない勉強を強いられ



るのは、耐えられないことであり、よそ見もしたくなるうしろ、席も立ちたくなるのもうなづける。子どもは実に自分自身の内部からの衝動に正直に従い、大人みたいに取りつくろったり、かっこうづけたりしないのだ。

最も自由な人々

私が就職する前には、小学校の1年生なんてのは全くの子どもで、幼稚で、世話ばかりかかって、つまらないだろうなあ、とよく考えていたが、1年たつ今は全く考えが逆で、1年生が担任できたことにととても感謝している。気づかぬうちに、私の心も1年生になっていて、彼らと対等に語り合い、口論し合っている。1年生は意外にも“おとな”である。むしろ成人した人間よりもっと質の高い教訓を数多く与えられるような気さえしてくる。

彼らは大人の知っている常識や慣習に束縛されない。自分の体が受けた印象に従って即座に小さな体全身を震動させて迫ってくる。ある女の子は、うれし

いことがあると輝かんばかりの大きな笑顔をつくって、ビョンビョン跳びはねて、その喜びを表現してくるし、調子のいいワンパク坊主は、御チンチンを丸出しに、フラダンスを披露し、それを見ちゃいかんとはばかり女の子はニコニコしながら小さな手で顔を覆うが、手と手のすき間から見ている……のでは？

地球の因襲から最も解放された子どもたちは、内部からの印象を忠実に表現してくる。その子らは私たちと同じく何世代にも渡って転生を繰り返して、学びの途上にある創造主の子である。彼らが私から学び取るものはたかが知れているが、私は40以上のものを彼らから学び取れることは素晴らしいことだ。ついつい、掃除が上手にできないからとか、授業中に消しゴムをいじって先生の話を聴こうとしないとか、忘れ物を毎日しているということだけで怒りの想念をまき散らしている我が身を反省し、自分は子どもたちとともに神聖な宇宙の渦中にいるのだという幸福に心から感謝したい。

編集後記

◎1月8日の東京本部月例会及び新年会に出席してきました。新年を迎えた会場は、昨年以上に「やる気」の波動に包まれており、圧倒される思いでした。その中に、一昨年の研修旅行中、アメリカのガイドをして下さった山本博氏の姿を発見し、驚きました。一時帰国中の氏によれば、Get-Acquainted というのはアメリカでは「知り合いにな

る」の意味のほうが強いということでした。(もうひとつは「知らせて」)今年も各地支部大会が予定されていますが、真実を知らせる。ばかりでなく、多くの人々と「知り合い」になり宇宙に大きな友情の「輪」を広げる意味でもチャンスを作って各地を訪れてみてはいかがでしょうか。◎3月の東京例会の体験講演は笠原代表です。(A)

草原

****我も人、彼も人**** 笠原弘可

「やってますよ！ 駅長が見てないだけでしょ」
—柄にもなく大声で言ってしまった。周囲の視線が一気に集まるのを感じた／国鉄批判時代である。内部的に言えば、管理者が主導権を取り戻した時代である。管理者に向かってヤクザのような口を堂々ときいた組合員は鳴りを静め、逆に管理者が強くなった。以前は組合的思考のゴリ押しがあったが、今は理不尽な当局理論がまかり通る。どうも国鉄は妥当な線であつて労使がかみ合うことを知らない／私は管理者でも組合員でもない。しかし、生まれつきの反骨心で変なことは変だと言う。以前は組合が過ぎる程言っていた。私はそれ程まで言う必要があるかしら、と首をひねっていた。時代が変われば、組合は手の平を返したように大人しくなった。中には骨のある組合員もいるが—／きちんとやっているのに、ひどい評価を下した駅長に私は抵抗したのだ。非組合員である私はそれまで大分軽く扱われていたようだ。その駅長が組合重視の人間だったせいもあるが、それ以後は大分変わった／「あなたが就職する場合、経営者があなたより優位にあると考えてはいけない。『この者は卑下しているのだな』と経営者が感じたら相手は自然に虚勢を張るようになりあなたを利用するようになる。経営者と同等の立場に立て。そうすればあなたを正当に扱うだろう。誰に対しても自己を卑しめるな。あなたは隣家の男と全く同様に「天の父」の御子である。神はえこひいきしない。我々は「感じ」を通じてのみ、より偉大な人間になれる事を知る必要がある。神の前で起き上がって立て！ しりごみをするな！」(G・A)